



TITLE:

<図書紹介>クンウィチットマート
ラー, 『タイ語の特質と変遷』,
Bangkok : Saansawan Press,
1965,ii+147p

AUTHOR(S):

桂, 満希郎

CITATION:

桂, 満希郎. <図書紹介>クンウィチットマートラー, 『タイ語の特質と変遷』, Bangkok :
Saansawan Press, 1965,ii+147p. 東南アジア研究 1968, 6(1): 230-231

ISSUE DATE:

1968-06

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/55477>

RIGHT:

1791年に王昶氏により *Yun-nan-t'ong-tche* に発表され、ついで1805年に同氏により *Kin-che-tsoei-pien* に載せられた。またさらに1807年に Che-fan 氏により *Tien-hi* にも載せられている。欧文では M. Edward Chavannes が *Journal Asiatique* に仏文を載せている。本タイ語版は歴史家の Nai Khacon Sukkaphaanit 氏が1964年にホンコン大学図書館にて、上記 Che-fan 氏の中国語版および Chavannes の仏語版をフォトスタットにしてタイ国に持ちかえたもので、フランス語からおよび中国語から両者のタイ語訳がおさめられており、原碑文の写真版も加えられている。フランス語版は美術局局長の Nai Thanit Yuuphoo 氏を経て Dr. Eugene Denis, S.T. により、また中国語版は Nai Chin Chumrum 氏を経て Luang Cin Yenkiat (Likhit Huntrakunn) 氏によりタイ語訳されたものである。

本碑文は中国人により中国語で書かれたもので、南詔時代のタイ語の資料にはならないが、数少ない歴史資料のうちでかなり詳しいものであるし、タイ語に訳されたのは本書が初めてであるから、歴史研究の資料としては非常に価値あるものだと言えよう。タイ国におけるタイ族に関する歴史(考古)研究は最近重要視され盛んになりつつあるが、漢籍の扱える研究者は極めて少ない。したがって、中国語版およびフランス語版の両者をタイ語訳し、原文も加えて1冊にまとめた本書は、タイの研究者にとって非常にありがたい資料と言わねばならないだろう。

(桂 満希郎)

クンウィットマートラー『タイ語の特質と変遷』Bangkok: Saansawan Press, 1965. ii+147 p.

ขุนวิจิตรมาตรา ลักษณะและวิวัฒนาการของภาษาไทย

本書は1967年1月19日より同年6月15日にかけて、Khurusaphaa のタイ語研究会(ชุมนุมภาษาไทย)にて行なわれた講義を1冊の本にまとめて出版したものであるが、タイ人によって行なわれたタイ語に

関する研究として意味あるものと言えよう。しかし、残念ながら、この期待は本書によってはかなえられないと言わなければならない。もっとも、著者自身も、専門的研究書として打ちだしているわけではないし、それよりもむしろタイ語についての取りとめの話と考えてほしい旨述べている(p. 3)ので、いたし方のないことかもしれない。本書はページ数もたいして多くはないし、章とか節とかに分けられているわけでもないが、内容的には、(1)タイ語と古代エジプト語、(2)タイ語における語グループ(“word family”と呼べるかどうかまだうたがわしいので仮にこう呼んでおく)、(3)タイ語とサンスクリットおよびパーリ語、(4)タイ語とタミール語、ペルシャ語、ヒンズースタニー語、アラビア語等、の四つの点について論じていることがわかる。

(1)においては、古来タイ国で行なわれてきた遊びの類に使用されている用語を古代エジプト語と関係づけて、同系の単語であろうと言う推定を下しているわけであるが、資料が少なくまた信頼できるものかどうか不確かなため信用しがたい。また、このことから大古の昔にさかのばれば、タイ人とエジプト人とは同系民族であったかもしれないと言う項(p. 41)は、あまりにもかけはなれすぎていて突飛な感をまぬがれない。(3)および(4)は、主としてタイ語に入った外国起源の単語で、比較的原形のつきとめにくいものを取りあげて、その語形変化および意味変化の過程について説明したのである。(2)は、本書全体を通じて最も興味深い点で、これはタイ語における形と意味との類似した単語(例えば、/plian/ «to change»と /phian/ «to deviate»; /khlûan/ «to move»と /lûan/ «to move off»となど)を集めて、それらを同一のグループに属するものとするのである。この問題にふれたのは本書が最初ではないが、これについて組織的に研究を進めれば面白いものになる可能性は充分にある。先にも述べたように、本書は本格的な学問書でもなく、何らかの具体的な結論を出したものでもないために、言語学的研究と思えば失望するかもしれないけれども、ざっと通読しただけでも、研究問題となる可能性のある事柄を沢山含んでいるものである。先にあげた点以外にも、タイ語の接頭辞である /pra-, pa-, kra-, ka-/ 等に触れた点なども、な

なかなか興味深い。最後に、現代のタイ語について、その乱れを憂えているが、これも面白い。タイ語に興味のある人は一読しても損をしない本である。

(桂 満希郎)

アユタヤ記念事業委員会編『アユタヤ記念講演集』第1, 2巻. Bangkok, 1968.

vi+315 p. (第1巻), vii+349 p. (第2巻)

กรรมการจัดงานอนุสรณ์อยุธยา รวมปาฐกถางานอนุสรณ์อยุธยา

1967年5月7日はアユタヤがビルマに滅ぼされてからちょうど200年にあたるため、同5月7日より24日にかけて、国立図書館においてその記念行事として、展示会および講演会が開かれた。本書はその際の講演原稿と録音テープとをもとにして2冊の本にまとめられたものである。したがって、主として歴史、考古学、芸術、文学、風俗習慣等の広範囲にわたって、全部で13のペーパーが集められており、さらに経過報告等を加えると16と言うことになる。巻の1および巻の2合わせて664ページのどの部分をひろってみても、非常に興味深くまた同時に研究上も意義あるものばかりである。本書にのせられたペーパーはこの講演のためにそれぞれ新しく準備されたものであって、今までに発表されたものの要約とか、やき直しとかではないから現在タイ国における研究の動向なり水準なりを知るうえでも有用なものだと言えるであろう。アユタヤをあつかった本は数多くあるけれども、その中のある一つの点について論じたものは案外少ないのではないかと思う。タイ国に関心のある者は是非読んでみるべき本である。私はこの本に取りあげられている分野について論じたり批評したりする資格はないので、以下内容

目録(ペーパーのみ)と筆者(講演者)名とをあげて紹介するにとどめる。

1. Samraan Wangsaphaa
アユタヤ時代の医学
2. Seni Praamoot
アユタヤ時代の法律
3. Chanthit Kraseesin
アユタヤ時代の高趣文学と平庸文学
4. Nikhom Muusikakhaama
アユタヤ時代の建築
5. Theep Sukkharatanii
アユタヤ時代の宗教
6. Phisit Charoenwong
アユタヤ時代の統治
7. Kachoon Sukkhaphaanit
アユタヤ時代の外交関係
8. Maanit Wanliphodom
アユタヤ時代の彫刻
9. Montrii Traamoot
アユタヤ時代の音楽
10. M.R.W. Kakrit Praamoot
アユタヤ時代の社会
11. Thanit Yuuphoo
アユタヤ時代の遊技
12. Damnoen Leekhakun
アユタヤ時代の軍事
13. Thnaihaan Yomanaat
大砲とター・カー・ローン寺

以上であるが、この講演を含めて記念祭全体はタイ国政府のもとに行なわれたものではなく、純然たる民間の有志によって開かれたものであり、閉会後いち早くその結果を本にして一般の人々に広めた点は称賛に値すると言わねばならないだろう。さきに、タイ国政府芸術局によってひらかれたセミナーの結果が一般には未だどうなっているのかさっぱりわからないため、よりその感を強くするのである。

(桂 満希郎)